



京大広報

No. 522

1998. 3

目次

〈大学の動き〉

- 名誉教授称号授与式448
- 平成10年1月博士学位授与式448
- ストックホルム大学、メルボルン大学及び
ルーバンカトリック大学との学術交流448
- 総合情報メディアセンター新システムで
運用開始449
- 平成10年度入学者選抜学力試験の
第1段階選抜状況452
- 新図書館業務システム・
電子図書館システムの運用開始453
- 「京都大学出向者懇談会」の開催454

〈部局の動き〉

- 第10回 21世紀の薬学を探る
京都シンポジウムの開催455
- エネルギー科学研究科公開講演会(東京)の開催455
- 平成9年度胸部疾患研究所講演会
「胸部研の57年」の開催456
- ウイルス研究所コロキウム
「転写因子間相互作用のダイナミズム」の開催456
- 放射性同位元素総合センター
教育訓練棟の共同利用開始457

〈日誌〉

-458

〈訃報〉

-458

〈随想〉

- 研究環境雑感 名誉教授 田中 茂利460

〈洛書〉

- 大学祝典曲始末記 谷口 安平461
- 入試の個別化に向けて 曾我 直弘461

〈公開講座〉

- 教育学部附属臨床教育実践研究センター
第1回リカレント教育講座「心の教育」を考える
—いじめ・不登校の心理臨床から—(終了報告)462

〈資料〉

- 平成9年度教育実習実施状況463

〈お知らせ〉

- 経済研究所公開シンポジウム並びに
学術講演会の開催464



平成10年度前期入学試験

大学の動き

名誉教授称号授与式

2月6日（金）午後3時から、総長室において総長特別補佐、医学研究科長出席のもとに名誉教授称号授与式が

号授与式が挙行され、水野 昇元教授（大学院医学研究科）に称号が授与された。

平成10年1月博士学位授与式

1月23日（金）午前10時30分から、京大会館において、平成9年11月と平成10年1月の博士学位取得者に対する授与式が挙行された。

総長から学位記が手渡された後、総長の式辞があり、午前11時40分終了した。

平成9年11月の学位授与数は、課程博士27名、論文博士31名の計58名、平成10年1月の学位授与数は、課程博士28名、論文博士41名の計69名であった。

各研究科別内訳は次のとおりである。

研究科	平成9年11月			平成10年1月		
	課程博士	論文博士	計	課程博士	論文博士	計
文学研究科	0名	3名	3名	2名	6名	8名
法学研究科	0	0	0	1	1	2
経済学研究科	0	2	2	0	2	2
理学研究科	6	2	8	5	1	6
医学研究科	9	6	15	10	3	13
薬学研究科	0	1	1	1	3	4
工学研究科	8	14	22	2	18	20
農学研究科	4	3	7	6	7	13
人間・環境学研究科	0	0	0	1	0	1

ストックホルム大学、メルボルン大学及びルーバンカトリック大学との学術交流

「学術交流に関する一般的覚書」が、平成9年8月5日にスウェーデン王国のストックホルム大学と、平成9年10月9日にオーストラリアのメルボルン大学と、平成9年11月19日にベルギー王国のルーバンカトリック大学とそれぞれ交換された。

上記三大学は、「京都大学国際教育プログラム」(KUINEP)の推進にともない覚書交換候補大学となり、その後、それぞれの大学と協議を重ね、「覚書」交換のはこびとなった。

ストックホルム大学は、1877年に創立された人文・社会科学系及び自然科学系の各分野をもつ大学で、教員数は1,150人、学生数は32,000人である。

現在同大学より、平成9年10月からスタートした「京都大学国際教育プログラム」に2名の学生が参加している。

メルボルン大学は、1853年に創立された人文・社会科学系及び医学・自然科学系の各分野をもつ総合大学で、教員数は2,082人、学生数は33,469人である。

ルーバンカトリック大学は、1425年に創立され、人文・社会科学系及び医学・自然科学系の各分野をもつ総合大学で、教員数は1,211人、学生数は20,897人である。

本学の「覚書」交換校は、上記3校を含めて現在19か国36大学2大学群である。

《注》教員数及び学生数は、「THE WORLD OF LEARNING, 1997」による。

総合情報メディアセンター新システムで運用開始

総合情報メディアセンターでは、1997年4月の設立以来、旧情報処理教育センターの器材を引き継ぎ、授業利用、オープンスペースラボの試行利用などを行ってきましたが、1998年2月にシステムの更新を行い、本格的な運用を開始しました。表に示すように、約1,200台のパソコン・ワークステーションを主センターとオープンスペースラボ、各部署のサテライト演習室に分散配置しています。現時点では、設定に不十分な部分などがあり、暫定運用としています。利用者のご意見を伺いながら、3月23日からの正式運用に向けて準備を進めております。

また、遠隔講義を行うためのサテライト講義室には、AV機器とネットワーク機器を導入し、運用実験を開始しました。何分、新しいシステムのため、現時点では、マニュアル類なども十分には整備できておらず、一般の利用者に使用していただく段階に至っていませんが、できるだけ早い運用開始を目指しております。更に、語学教育のためのCALL教室にもCALL用端末を60台設置し、4月からの授業開始に向け、調整・教材作成などを進めています。その他、教材作成用の機器も導入し、運用開始に向けて準備中です。

なお、新システムの運用開始の区切りとして、3月20日午後に、オープニングセレモニーを開催します。これにあわせて、15時30分から楽友会館1階のオープンスペースラボでデモンストレーションを行いますので、興味のある方はお越しください。

本学の構成員全てに本センターを利用していただくために、センターニュースや掲示で周知を図っています。センターを利用するための利用登録などは以下のとおりです。

センターの利用について

1. 利用登録

センター利用のためには利用登録をして頂く必要があります。教職員（名誉教授を含む）の方は、職員証を持参の上、センター技術相談室（工学部1号館1階）の登録受付窓口までお越しください。学生の方については、講習会の受講を義務付けております。2月12日より同19日および27日に第一次の講習会・登録を行いました。未登録の方は、予約制の

講習会を開催しますので、掲示などに注意して下さい。

2. オープンスペースラボ

全学生・全教職員が利用可能なオープンスペースラボを楽友会館1階に開設しています。センターの機器を自由に利用できます。3月中の開館時間は、平日の10:00~16:00を予定していますが、4月以降、開館時間の延長を行います。入退室には、附属図書館利用証が必要ですので、ご注意下さい。



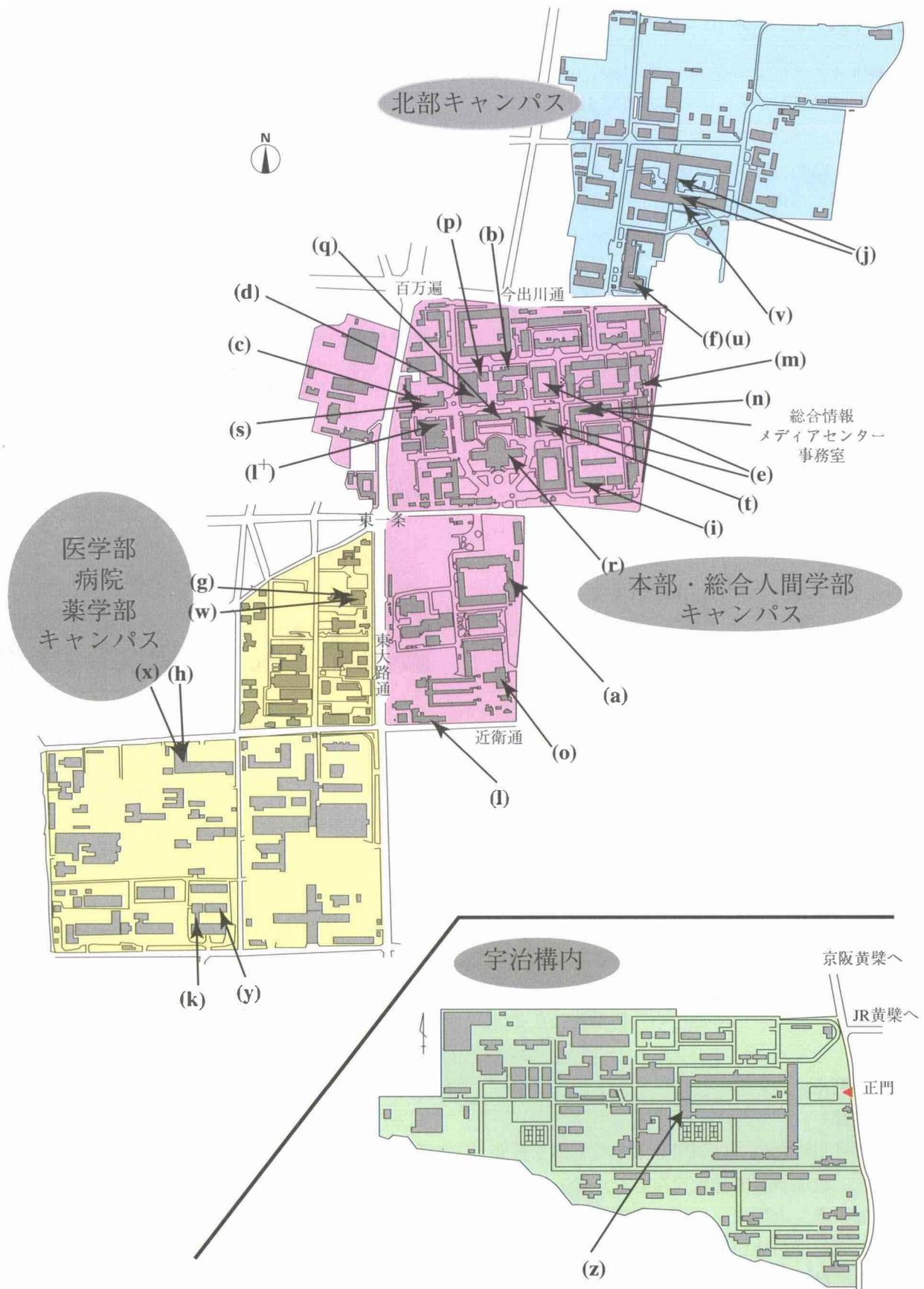
3. サテライト開設

配置図に示す通り、各部署にはサテライト演習室を設置しています。利用可能な時間や利用方法については各部署から掲示等がありますので、それに従ってください。

4. スタートアップガイドと利用相談

メディアセンターニュースNo.2（発行済み）、No.3（3月末発行予定）に初心者用のスタートアップガイドを掲載します。保存しておいてください。ガイドを含め、メディアセンター利用上の最新情報を<http://www.media.kyoto-u.ac.jp>に掲載して行きますので、ご参照下さい。更に、4月1日以降、オープンスペースラボにティーチングアシスタント（TA）が常駐し、技術的な利用相談を行います。

5. メディアセンター配置図と情報機器数一覧は次頁のとおりです。



サテライト演習室位置とPC/WSの各サテライト及びセンター等での設置台数

地図上の記号	配置部局	教室等	新システム	配置形態(予定)
a	総合人間学部	2階講義室(A203)	PC:55, PR:1	スクール形式
		3階講義室(A303)	PC:55, PR:1	スクール形式
b	文学部	3階情報処理端末室	PC:48, PR:1	スクール形式
c	教育学部	4階調査計算機室	PC:10	演習形式
		2階計算機室	PC:10, PR:1	演習形式
d	法学部	2階法経北館204号室	PC:7	演習形式
		2階法経北館205号室	PC:13, PR:1	演習形式
e	経済学部	3階統計作業室(328号室)	PC:20, PR:1	演習形式
		文学部東館1階	PC:40, PR:1, VOD:1	スクール形式
f	理学部	1号館4階計算機端末室	WS:60, PR:1, VOD:1	演習形式
g	医学部	総合解剖センター4階実習室	PC:50, PR:1, VOD:1	スクール形式
h	薬学部	2階情報処理教室	PC:40, PR:1	演習形式
i	工学部	2号館2階演習室(201)	WS:50, PR:1	スクール形式
		2号館2階演習室(202)	WS:50, PR:1	スクール形式
		2号館2階演習室(204)	PC:50, PR:1	スクール形式
		2号館2階演習室(205)	PC:50, PR:1	スクール形式
j	農学部	総合館1階S141	PC:30, PR:1	演習形式
		総合館2階C226	PC:30, PR:1	演習形式
k	医療技術短期大学部	1階端末室	PC:40, PR:1	スクール形式
l+	図書館	3階(北側)	PC:25, PR:1	演習形式
l	オープンスペースラボ	楽友会館1階	WS:69, PR:2	演習形式
		楽友会館1階	PC:102, PR:2, VOD:24	演習形式
m		旧工学部高度情報1階講義室	WS:93, PR:2, VOD:1	スクール形式
n	総合情報メディアセンター	工学部1号館地階講義室	WS:54, PR:1	スクール形式
		工学部1号館地階演習室	PC:25, PR:1, VOD:1	演習形式
		工学部1号館2階講義室	PC:60, PR:1, VOD:1	スクール形式
		工学部1号館2階教材作成室	WS:2, PC:2, PR:2, VOD:1	演習形式

注1:上記の台数は、サーバとネットワーク関連機器を含みません。
 注2:スクール形式…教卓等が設置されている部屋。
 注3:演習形式…教卓等が設置されていない部屋。

サテライト講義室(遠隔講義室)の位置

地図上の記号	配置部局	教室等
o	総合人間学部	E31号室
p	文学部	新棟2階講義室
q	法学部	法経新館2階特別講義室
r	経済学部	法経2番
s	教育学部	第2講義室
t	工学部8号館	大講義室2
u	理学部	理1号館4階計算機端末室
v	農学部	W100号室
w	医学部	総合解剖センター1階第3講義室
x	薬学部	本館2階22番講義室
y	医療技術短期大学部	第2大講義室
z	エネルギー科学研究科	宇治本館5階N503号室

(総合情報メディアセンター)

平成10年度入学者選抜学力試験の第1段階選抜状況

平成10年度入学者選抜学力試験の第1段階選抜が行われ、2月12日（木）、志願者に通知された。学部別の合格者数は次表のとおりである。

学 部	募集人員	志 願 者 数 (倍率)	第 1 段 階 選 抜		本年度「募集要項」 の第1段階選抜合格 者の範囲		
			合格者数	倍 率			
総合人間学部	前 期	110	401 (3.6)	390	3.5		
	文系	55	211 (3.8)	204	3.7		
	理系	55	190 (3.5)	186	3.4		
	後 期	20	364 (18.2)	320	16.0	約12.0倍	
文 学 部	前 期	190	655 (3.4)	654	3.4	約 3.5倍	
	後 期	30	374 (12.5)	293	9.8	約 5.0倍	
教育学部	前 期	40	220 (5.5)	157	3.9	約 3.5倍	
	後 期	20	161 (8.1)	138	6.9	約 5.0倍	
法 学 部	前 期	332	970 (2.9)	970	2.9	約 3.5倍	
	後 期	58	638 (11.0)	527	9.1	約 8.0倍	
経 済 学 部	前 期	210	843 (4.0)	797	3.8		
	一般	160	548 (3.4)	546	3.4	約 3.5倍	
	論文	50	295 (5.9)	251	5.0	約 5.0倍	
	後 期	30	435 (14.5)	417	13.9	約 7.0倍	
理 学 部	前 期	294	963 (3.3)	932	3.2		
	後 期	32	1,201 (37.5)	1,173	36.7		
医 学 部	前 期	90	493 (5.5)	409	4.5	約 4.0倍	
	後 期	10	263 (26.3)	151	15.1	約10.0倍	
薬 学 部	前 期	70	215 (3.1)	215	3.1	約 3.5倍	
	後 期	10	136 (13.6)	136	13.6	約10.0倍	
工 学 部	前 期	922	2,478 (2.7)	2,474	2.7	約 3.0倍	
	後 期	108	1,306 (12.1)	1,303	12.1	約12.0倍	
	地球工学科	前 期	188	525 (2.8)	524	2.8	
		後 期	22	263 (12.0)	263	12.0	
	建築学科	前 期	85	247 (2.9)	246	2.9	
		後 期	10	130 (13.0)	130	13.0	
	物理工学科	前 期	232	578 (2.5)	578	2.5	
		後 期	28	329 (11.8)	329	11.8	
	電気電子工学科	前 期	126	330 (2.6)	330	2.6	
		後 期	14	176 (12.6)	176	12.6	
	情報学科	前 期	81	212 (2.6)	212	2.6	
		後 期	9	133 (14.8)	133	14.8	
	工業化学科	前 期	210	586 (2.8)	584	2.8	
		後 期	25	275 (11.0)	272	10.9	
	農 学 部	前 期	248	889 (3.6)	889	3.6	約 3.5倍
後 期		62	902 (14.5)	902	14.5	約10.0倍	
合 計		2,886	13,907 (4.8)	13,247	4.6		
	前 期	2,506	8,127 (3.2)	7,887	3.1		
	後 期	380	5,780 (15.2)	5,360	14.1		

(注1) 総合人間学部前期及び理学部前期は、大学入試センター試験の5教科6科目の合計得点が800点満点中550点以上の者を第1段階選抜合格者とする。

(注2) 理学部後期は、大学入試センター試験の3教科3科目の合計得点が500点満点中300点以上の者を第1段階選抜合格者とする。

(注3) 法学部（後期日程）と経済学部（後期日程）の募集人員には、「外国学校出身者のための選考」の20人（法）と10人（経）が、志願者数には64人（法）と38人（経）が、第1段階選抜合格者数（第1次選考合格者数）には44名（法）と20名（経）がそれぞれ含まれています。

新図書館業務システム・電子図書館システムの運用開始

平成10年1月6日から、本学新図書館業務システム・電子図書館システムの運用を開始しました。導入されたシステムは、電子図書館システムにおいては画像データ10万画像以上、文字テキストデータ1,000万文字以上が蓄積可能なシステムで、業務システムは、オープン・システムを指向したサーバ・クライアント・システムです。

サーバは、附属図書館に業務・電子図書館用併せて12台、分散データベース統合検索用が部局に3台、計15台が設置されて稼働を始めています。クライアントは、附属図書館を始め26部局に業務用・検索用・電子図書館用併せて320台の配置が完了しました。

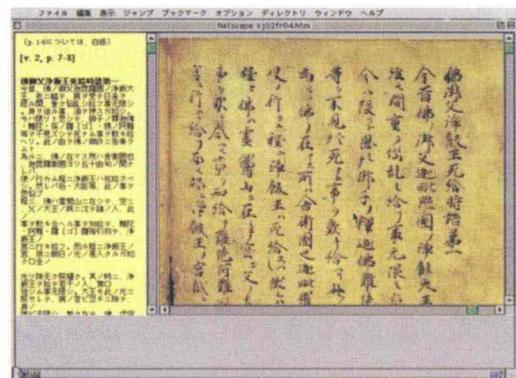
一方、ソフトウェアとしては、富士通株式会社製新図書館業務システム(iLiswave)と同社製電子図書館システム(iLisminds)が導入されています。これらのパッケージ・システム以外に、Microsoft社のOffice97が全てのクライアントにインストールされており、非定型業務の処理のために、Word(ワープロ)、Excel(表計算)、Outlook(電子メール)なども活用できます。

それでは、新しく稼働を始めた電子図書館システムで利用できるコンテンツと新しい機能の一部について以下に紹介します。

コンテンツには、情報発信と情報配信という二つの側面があります。

まず、情報発信には、本学が所蔵している貴重資料、および本学で生産される学術情報があります。貴重資料については画像データ、学術情報については文字テキストにし、これら電子化情報を発信します。今後は、これらの資料・情報の電子化作業を進め、「京都大学エンサイクロペディア」として提供することが目標です。

すでに公開している画像データの代表的なものに、国宝『今昔物語集(鈴鹿本)』や重要文化財『古今集註』(古今和歌集)などの貴重資料があります。現在、国宝1点、重要文化財5点、貴重書20点の合計26点の貴重資料があり、画像種類数約10,000種、20,000画像のデータ量になります。また、新たに維新資料の提供を開始しました。これらの資料は、幕末維新の長州藩の志士で後に子爵となった品川弥二郎が全国に呼びかけて「尊攘堂」に収集した、明治維新に活動した志士たちの遺品・墨跡類等の資料群の画像データです。画像は6,500種類ほどになり



国宝『今昔物語集(鈴鹿本)』の画像データ(右)と翻刻文(左)です。

文字テキストデータとしては、本学で生産される学術情報として、『京都大学百年史』の部局史編の電子化を進めています。

次に、情報配信するコンテンツについて紹介します。

すでにネットワークで検索可能な文献情報として、医学・生命科学文献情報のMedline、地質学・地球科学文献情報のGeoRef、心理学・行動科学文献情報のPsycLitなどがありますが、新たに化学文献情報の『Chemical Abstracts』、我が国で刊行されている雑誌約5,500種の目次を集めた『雑誌記事索引(遡及, カレント)』、戦後50年の朝日新聞記事索引である『ASAX』、英語大辞典『Oxford English Dictionary』、日本語辞書『広辞苑』の5種類のデータベースの提供を開始しました。この他に、CD-ROMを媒体とする文献情報の中には、ネットワーク提供ができないものも多数あります。附属図書館1階の6台のパソコンでしか利用できないものが、全部で31タイトルありますが、その解説付きのリストを電子図書館システムのメニューに付加しました。

また、電子ジャーナルについては、今後、32タイトルについて、3年間程度の試行サービスをする予定です。この電子ジャーナルの利用の特色の一つは、検索目的に合った論文の配信にあります。専門分野のキーワードを登録しておけば、ジャーナルが新しく追加される度に、登録しておいたキーワードで検索を実行し、その結果、該当するものがあれば、その論文を配信することが可能となります。

次に、電子図書館専用クライアントの新しい機能について紹介します。まず、フル・テキストで蓄積された本文データについて使用できる「InfoBrick」

の機能です。この機能を使うと横書きのテキストを縦書きに直すことが簡単にできます。そして、画面上で実際に書物のイメージでページをめくってゆく機能があります。これは、「Book Metapher」と呼んでいます。また、このテキストの一部分に付箋を張り付けておき、後でその付箋をたどることができる機能や付箋部分にメモをつける機能、さらに、今後は本文データの好みの部分を指定して、朗読させる機能や、その部分を機械翻訳させることも可能となります。しかし、これらの新しい機能は、現在のところ、電子図書館専用クライアントからしか利用できませんが、今年の秋頃には、お手元のパソコンの汎用的なネットワーク・ブラウザからの利用が可能となる予定です。

もうひとつ、本文検索についての新しい機能があります。OPAC (Online Public Access Catalog) と同じように書誌の検索の他に、検索語の同義語や訳語についても検索することが可能となります。ただし、本文データ (全文テキストデータ) が必要となりますが、現在のところは『京都大学百年史』しかありません。

また、インターネット上の日本語の本文データとしては、『万葉集』を始め400種類程度の作品が登場しているに過ぎません。これに比べて、海外では数多くの文学作品テキストが公開されています。アメリカのゲーテンベルク・プロジェクトでは、1,000点の作品が公開されています。ペルセウス・プロジ

ェクトでも数百点が公開されています。このように日本文学のテキストの作成は、資料の電子化についての今後取り組むべき方向性を示しているのかも知れません。しかし、日本語テキストの作成においては、専門家による翻刻作業が不可欠となり、また、コード化されていない文字やルビの処理問題など技術的に解決されなければならない問題も多数あります。日本語テキストだけでなく、「京都大学エンサイクロペディア」の構築にも専門分野の諸先生方の協力が必要となります。より一層のご協力・ご支援をお願いします。

一方、新たに運用を開始した図書館業務システムにおいては、大学共同利用機関である学術情報センターのプロトコル (catp) を使った新たな目録所在情報サービスを利用して目録データを作成し始めました。また、新しいOPACは、汎用性の高いネットワーク・ブラウザから、簡易な操作で、24時間、学内はもとよりどこからでも利用できるようになりました。さらに、今後、各部局の整備にあわせて、目録所在情報形成に至るまでの資料管理業務や利用者サービス業務が全学的なシステムで展開・稼働する予定です。これらのシステムの稼働によって、全学で電子化された図書館 (資料) 情報が有効かつ迅速に形成・利用されるとともに、学外からの利用要請にも適切に対応できる便利なシステムとして機能することを願ってやみません。

(附属図書館)

「京都大学出向者懇談会」の開催

本学では、「京都大学出向者懇談会」を去る1月23日 (金) 午後6時から、ホテルサンフラワー京都 (京都市左京区) において開催した。

この懇談会は、本学から他機関へ出向している事務系職員と事務局長等との懇談の場を設け、親睦を深め、近況等情報交換を行うことを目的として年1回開催されるものであり、平成元年度より開催されている。

懇談会では、初めに黒川事務局長から挨拶があり、次いで佐藤庶務部長の発声で乾杯の後、和やかに懇談した。当日は、本学事務局長等職員25名と出向者125名が出席した。

なお、現在、本学から近畿地区国立大学等への出向者は、27機関に166名 (課長級1, 補佐級15, 係



長級72, 主任27, 係員51) 他機関からは、18機関56名の補佐・係長等を受け入れ、相互交流を積極的に行っており、本学は近畿地区国立学校等において、人事交流の中心的な役割を果たしている。

部局の動き

第10回 21世紀の薬学を探る京都シンポジウムの開催

標記シンポジウムが平成10年2月14日(土)午後、薬学部記念講堂において開催された。本シンポジウムは、薬学部創設50周年記念事業の一環として京都大学薬友会の主催により平成元年に開始されたもので、今回はその第10回として薬学研究科中川照眞教授の企画により「知の細分化から体系化へ」をテーマとして4題の講演が行われた。

冒頭の佐藤公道薬学研究科長の開会の挨拶に続いて、後藤順一教授(東北大学薬学部)による「質量分析法の新展開」と題した講演が行われ、薬物や生体物質の質量分析法の最新の発展と応用に関する解説が行われた。続いて真弓忠範教授(大阪大学薬学部)による「遺伝子治療そして細胞性製剤への道」と題した講演が行われ、薬物の新しい投与形態について21世紀に向けた提案が行われた。牧野圭祐教授(本学エネルギー理工学研究所)の「一酸化窒素生化学の新しい展開」は、現在最もホットな話題を扱ったものであり未知の世界への挑戦意欲をかきたて



る講演であった。最後に森島 績教授(本学工学研究科)による「ヘム蛋白質の分子工学」と題した講演が行われ、人工蛋白質のデザインと機能の開発について熱のこもった話が展開された。聴衆は薬学関係者を中心に一般参加者を加えた約150名で、21世紀に向けた薬学をめぐる議論に熱心に耳を傾けていた。

(大学院薬学研究科)

エネルギー科学研究科公開講演会(東京)の開催

平成8年度に創設された大学院エネルギー科学研究科は、今春初めて修士課程の修了者を社会に送り出す運びとなり、これを記念して去る1月28日午後2時より東京経団連会館・経団連ホールで、「21世紀とエネルギー公開講演会—人間・環境と調和あるエネルギーシステムの創生をめざして—」を開催した。

本講演会は文部省、通産省、科学技術庁、読売新聞社の後援並びに電気事業連合会、日本電機工業会、石油連盟、日本鉄鋼連盟、日本自動車工業会、日本ガス協会の協賛を得て開催された。昨年12月の地球温暖化防止京都会議によるエネルギー環境問題の関心の高まりもあって、産官学から約600名の参加者があり、大盛況であった。

講演会では新宮秀夫研究科長が「京都大学におけるエネルギー科学教育・研究」、佐和隆光教授が「21世紀の難問—勃興のアジアと日本の役割」、神田啓治教授が「21世紀こそ原子力の時代か」、池上詢教授が「熱エネルギーの有効利用と環境保全」と題して21世紀とエネルギーについて様々な視点から講演を行った。



引き続き懇親会が開催され、長尾 真総長、有馬朗人理化学研究所理事長、高 為重文部省高等教育局審議官、谷口富裕通産省資源エネルギー庁審議官、電気事業連合会を代表して鷲見楨彦関西電力副社長の挨拶に続き、日本鉄鋼連盟を代表して浅村 峻新日本製鐵副社長の発声により乾杯があり、約450名の出席者による歓談が遅くまで続いた。来賓からは、今回の講演会は3省庁後援という斬新な企画であること、来世紀のエネルギー問題解決には京都大学の伝統に期待していること、など本学関係者にとっては身の引き締まる言葉が述べられた。

(大学院エネルギー科学研究科)

平成9年度胸部疾患研究所講演会「胸部研の57年」の開催

胸部疾患研究所は、昭和16年に結核研究所として発足以来、研究の進展と社会の要請に応じ、昭和42年結核胸部疾患研究所、昭和63年胸部疾患研究所へ改組し、呼吸器疾患に関する基礎と臨床研究を行う我が国の中心的研究機関として、多大なる成果を挙げ今日に至った。さらに、平成10年度より生体組織や臓器等の再生研究を目的とする再生医科学研究所へ全面改組することとなり、これに伴い環境呼吸器病学、感染・炎症学、胸部外科学の各臨床系分野と研究所附属病院はそれぞれ医学研究科、医学部附属病院へ移行し、新たなる出発をする運びとなった。

当研究所ではこれを機会に、結核研究所・結核胸部疾患研究所・胸部疾患研究所としての57年の歩みを回顧し、今後の発展を期することを意図して、2月14日（土）午後3時から京大会館にて平成9年度胸部疾患研究所講演会を開催した。

講演会には、同窓会員を含め約100名が参加し、胸部疾患研究所としての最後の講演会となることで、本研究所出身者である日置辰一朗元京都市立病院院長、岡田慶夫元滋賀医科大学長、市川康夫本学名誉教授の3氏に講演を依頼し、それぞれの演者から



は結核の時代から非結核の時代への臨床、臨床研究をめぐる話題、苦労話などが懐かしく語られた。また、講演会参加者には、多数の同窓会員より寄せられた回顧談等を冊子にした『胸部疾患研究所の57年』が配布された。

引き続き懇親会が開催され、人見滋樹胸部疾患研究所附属病院長の挨拶の後、西岡 諄元助教授（昭和16年卒業）の発声で乾杯、全国から出席した同窓会員及び関係者等100名がなごやかに歓談し、胸部疾患研究所の終焉を惜しみつつ午後7時盛会のうちに終了した。

（胸部疾患研究所）

ウイルス研究所 コロキウム「転写因子間相互作用のダイナミズム」の開催

平成9年度コロキウムを2月9日（月）午後1時～6時半、2月10日（火）午前9時～12時の両日に京大会館101号室で開催し、来聴者は170名を超えた。

コロキウムは、学外若手研究者を招へいし、当研究所教官とともに特定のテーマについて研究発表・討議を行うことを目的としている。今年度は、新たに海外から2名の講演者を招へいした。

伊藤嘉明ウイルス研究所長の挨拶で始まり、本年度は「転写因子間相互作用のダイナミズム」というテーマで9日に7演題、10日に4演題の計11演題の

講演があった。さまざまな生理作用の根底には、個々の細胞レベルにおける遺伝子の発現（＝転写）調節がある。この調節にあたる制御蛋白質は転写因子と総称されるがその構造や機能は極めて多岐にわたっている。

今回のコロキウムでは、この“転写因子”をキーワードとして、多様な生物現象とモデル生物系について意見を交換し、遺伝子の発現制御と細胞癌化、増殖制御、形態形成、内分泌現象の関与について、活発に討議を行った。

演題・講演者

2月9日（月）

「基本転写因子TF II Dのサブユニットであるγ TAF II 145の機能解析」

古久保哲朗（奈良先端科学技術大学院大学バイオサイエンス研究科）

「酵母コリプレッサー Tup1-Ssn6による転写抑制」

向 由起夫（大阪大学工学部）

「Runtドメイン族転写因子PEBP2/CBFの構造機能と発生分化における役割」

重定 勝哉 (ウイルス研究所)

「転写調節因子は染色体複製も制御する」

村上 洋太 (ウイルス研究所)

「転写因子E2FによるG1/S期移行の制御」

加藤 順也 (奈良先端科学技術大学院大学バイオサイエンス研究科)

「E1Aによる核内レセプター・CBPコアクチベーター複合体形成の阻害機構」

黒川 理樹 (カリフォルニア大学サンディエゴ校)

「レセプター型転写因子の細胞内挙動と転写制御の機構」

梅園 和彦 (ウイルス研究所)

2月10日 (火)

「Armadillo/ β -カテニンの機能的二面性を利用した新しいパターン形成遺伝子の探索」

上村 匡 (大学院理学研究科)

「マウス胚後脳におけるFgf-3遺伝子のセグメント特異的な発現」

村上 昭 (ウイルス研究所)

「identity/polarityと転写因子-ニワトリの肢芽と眼球をモデルとして」

小椋 利彦 (奈良先端科学技術大学院大学バイオサイエンス研究科)

「アフリカツメガエルでのWntとTGF- β 系成長因子における転写調整機構」

Ken W. Y. CHO (カリフォルニア大学アーバイン校)

(ウイルス研究所)

放射性同位元素総合センター教育訓練棟の共同利用開始

〔教育訓練棟の役割〕

放射性同位元素総合センター (RIセンター) では、本年4月から教育訓練棟 (新棟) を利用して、放射性同位元素の取り扱いの教育訓練を開始する。参加者は全学から公募する予定である。

放射性同位元素 (RI) を取り扱うためには、放射線障害の防止に関する法律に基づく、放射線障害の防止に必要な教育訓練が必要である。本センターの教育訓練は、最新の空調・排水設備を備えた施設で、非密封RIの使用から廃棄までの一連の操作を含む安全取り扱いの実習および視聴覚機器を備えた講義室での授業を行い、教育訓練をより役立つものにしたと願っている。

なお、平成10年度の本センターの実施する教育訓練等の計画の概要は、以下のとおりであるが、平成10年度からは医学部、薬学部などの学生実習も予定している。

1. 京都大学放射線障害予防小委員会が主催する教育訓練 (新規 (4回) 及び再教育)

これまでは講義のみであったが、一部に実習を

とり入れる。

(実習日時未定 (予定時期 5月~2月))

2. RIセンターが主催する講習会等

(実施予定時期 4月~12月)

これまで行ってきたセンター利用者のためのオリエンテーション (第1回 (4/6・7), 第2回 (6/1), 第3回 (9/25), 第4回 (12/16)), 動物実験講習会 (第1回 (6/3), 第2回 (9/28)), 液体シンチレーション計測講習会 (11月下旬), 放射性有機廃液処理講習会 (4月上旬) などをより充実させる。



3. 全学共通科目「放射性同位元素と放射線の取扱入門」の実習（実施予定時期 10月～3月）
昨年度までは講義が中心であったが、実習をとり入れる。
4. 学部学生の実習（実施予定時期 5月～7月）
学部単位で行う実習で、原則として各学部の教官が指導を担当し、RIセンター教職員が協力す

- る。費用は学部負担となる。
5. その他
大学院学生を対象に高度で専門的なRI実習（例えば遺伝子研究におけるRI利用）などの実施を検討中であるが、RI教育訓練についての各部局からの希望、要望を是非寄せていただきたい。
(放射性同位元素総合センター)

日誌

1998年1月1日～1月31日

- | | | | |
|------|--|-----|--|
| 1月5日 | 新年名刺交換会 | 22日 | フランス共和国 Henri ANGELINO大使館科学技術参事官来学，総長及び関係教官と懇談 |
| 13日 | 評議会 | 23日 | 学位授与式 |
| 16日 | 同和・人権問題委員会 | 26日 | 発明審議委員会 |
| 17日 | 大学入試センター試験（18日まで） | 27日 | 評議会 |
| 20日 | 附属図書館商議会 | 29日 | 保健衛生委員会 |
| 21日 | 国際交流委員会 | 30日 | ドイツ連邦共和国 Walter LINK連邦議会議員他8名来学，総長及び関係教官と懇談 |
| 〃 | 国際交流会館委員会 | | |
| 22日 | アメリカ合衆国 Gerald HANE科学技術担当官補佐来学，総長及び関係教官と懇談 | | |

訃報

岩崎 敷久 大学院理学研究科教授



大学院理学研究科教授岩崎敷久先生は、1月24日逝去された。享年55。

先生は、昭和40年京都大学理学部数学科を卒業後、同大学院修士、博士課程を経て同43年4月京都大学数理解析研究所助手に採用された。奈良女子大学理学部助教授および教授を経て、平成元年4月京都大学理学部教授に就任された。

先生は、弱双曲型偏微分方程式の初期値問題、退化放物型偏微分方程式の基本解の構成、散乱問題などに関する分野で卓越した研究業績を残され、その

発展に寄与された。特に初期値問題の適切性に関する、実効的的双曲型方程式の研究については国際的にも高い評価を受けられ、内外の研究者に大きな影響を与えられた。さらに日本数学会関数方程式論分科会評議員などを務められ、学会の発展に尽くされた。

また先生は、理学部および大学院理学研究科において学生の教育・指導に情熱を傾け後進の育成に努められた。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

(大学院理学研究科)

波多野博行 名誉教授



本学名誉教授波多野博行先生は、1月25日逝去された。享年73。

先生は昭和22年京都帝国大学理学部化学科を卒業し、同学部副手、京都大学理学部助手、神戸大学理学部講師、本学理学部講師を経て、昭和38年同教授に就任、同63年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。この間、昭和52年4月より理学部附属機器分析センター長として退官まで管理運営面に貢献された。

本学退官後は、平成4年3月まで神奈川歯科大学教授を務められた。

先生は、放射線などのエネルギーにより生じる基礎的な化学反応や、分子間に働く相互作用を新しい方法論を開発して究明された。特に低分子から蛋白質に至る種々の化合物に対する放射線照射の初期過程、中間体ラジカル等に関する研究、酵素、蛋白質、核酸の反応および構造に関する生化学的、物理化学的研究に多大の功績を残された。また、アミノ酸分析計の開発を始めとして、クロマトグラフィーの研究、発展に指導的役割を果たされた。

また先生は、日本放射線化学会会長、日本学術会議第11期および第12期会員として活躍された。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

(大学院理学研究科)

北田 俊夫 原子炉実験所経理課文部技官



原子炉実験所経理課文部技官北田俊夫氏は、1月29日急逝された。享年52。

同氏は、昭和39年原子炉実験所に就職され、以来ボイラ技士として業務に尽力、永年

にわたり原子炉実験所のボイラ施設の運転・保守管理業務に多大の貢献をされた。

また、平成6年には、京都大学永年勤続者表彰(30年勤続)を受けられた。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

(原子炉実験所)

林屋辰三郎 名誉教授



本学名誉教授林屋辰三郎先生は、2月11日逝去された。享年83。

先生は、昭和13年京都帝国大学文学部史学科を卒業後、同大学文学部副手、第三高等学校講師、立命館大学講師、助教授、教授を経て、昭和45年本学人文科学研究所教授に就任し、同53年停年退官まで、日本文化研究部門を担当された。この間、昭和49年4月から同53年3月まで人文科学研究所長並びに人文科学研究所附属東洋学文献センター長を務められ、評議員、同問題委員会委員など多くの学内委員を歴任され、大学の管理運営にも大きく貢献された。昭和63年京都大学名誉教授の称号を受けられた。

本学退官後は、昭和53年4月から同60年3月まで

京都国立博物館長を務められ、また日本学士院会員として活躍中であった。

先生は、日本中世史研究から出発しながら、論は古代から近世に、またその対象は政治史から文化史におよび、提出された説の多くが学界の確固たる定説となった。「町衆」の概念「化政文化」の捉え方などはその最たるものであった。主要論文は『日本史論聚』に収められている。

日本史研究会代表、芸能史研究会代表をはじめとする活動は学界に強い影響を与え、昭和36年芸術選奨文部大臣賞を受けたのを始め、朝日賞、毎日出版文化賞、京都市教育功労者表彰、京都新聞文化賞など、受賞は枚挙にいとまがない。昭和54年紫綬褒章、同60年勲二等瑞宝章を受けられた。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

(人文科学研究所)

随想

研究環境雑感

名誉教授 田中 茂利

私はプラズマ物理、核融合研究が開始された昭和34(1959)年頃、プラズマの最も基本的、かつ特徴的物理現象の一つであるプラズマ波動、特に無衝突ランダウ減衰及びサイクロトロン減衰の実験的研究を始めた。初めに気体放電管内のプラズマを対象として実験を行い、特殊な気体のプラズマでは電波の減衰と逆の増幅現象を見いだした。しかし、電子サイクロトロン(EC)減衰の解明はこの弱電離プラズマを使う限りは不可能で、粒子間衝突の少ない高電離、高温プラズマについて実験する事が不可欠であった。幸いに当時の共同利用研究所(名大プラ研)から小型トカマク装置(WT-1に改造)を移管して実験が継続できた。



ところでトカマクはトーラス型プラズマに沿って電磁誘導によるプラズマ電流を流して加熱と共に、閉じこめに必要な回転変換磁場を作る事が要求されるために、さらなる加熱と非誘導定常電流駆動法を考案、実証する事が、重要課題の一つであった。我々はこの課題の基礎研究をEC波、並びに低域混成波に依るEC並びにランダウ減衰に依って行う事を目的として実験装置WT-2を特別設備費によって設置した。

これによって多くの興味ある結果が得られたが、小型装置による制約が有り、さらに詳細なデータを必要とした。そこで時間、空間分解を含め、多面的な研究が可能となるトーラス型プラズマ波動加熱実験装置WT-3(京大広報No.326表紙写真1987.2)によるプロジェクト研究を計画した。これは核融合実験としては小規模ではあるものの、大学の実験装置としてはかなり大きいものにならざるを得なかった。工学部と協力し学内共同利用教育研究施設として計画が進められた。幸いにも予算が認められたが、実施段階では幾つかの難題に悩まされた。装置本体と電源及び計測装置を収容する実験棟を新たに建てる事が必要で、その土地を求めるのが最大の難問であった。紆余曲折の末、現在の理学部プラズマ実験

棟(旧食糧科学研究所跡地)が建てられる事になったが、建物は高さは市条例と日照問題、地下室は予算で制限され、現在の形となった。境界では工事を中止して協議した事もあった。

この実験装置WT-3によって物理的に興味あり、核融合研究に重要な多くの成果が得られた。特に、全プラズマ電流をEC波、並びに低域混成波に依って駆動出来ること、さらにこの2つの高周波電力を重畳、印加してオーム電力不要の「高周波トカマク」を生成出来る事を世界で初めて示した。多くの外国人研究者も来訪され、ここで得られた成果の数々に興味を持ち、このWT-3は世界一cost-performanceの良い装置だと絶賛してくれた。その折りに彼等が異口同音で驚嘆するのは、研究者数の少ない事であった。

そもそもこのプロジェクトは学内共同教育研究施設「京大プラズマ理工学教育研究センター」の概算要求として行われたが、研究組織は「設置推進委員会」の努力にも拘わらず実現しなかった。この問題は学内外の状況の変化に応じて「プラズマ研究にかかる懇談会」、さらには「応用物理構想検討委員会」の中で、京大のプラズマ教育研究体制のあり方として審議されてきたが、研究組織は遂に設置されず甚だ残念であった。しかしこれが新たな「エネルギー科学研究科」への道につながったものと想像されて今後の研究の展開を期待するものである。

(たなか しげとし 元理学部教授 平成4年退官 専門はプラズマ物理、核融合科学)

資料

平成9年度教育実習実施状況

教育実習は教育職員免許状の取得を希望する者にとっては、教育職員免許法に基づき教育実習にかかわる事前及び事後指導の1単位を含め、3単位必ず習得しなければならないものである。本学では、事前指導として例年、5月上旬にまず教育実習オリエンテーションを2日間実施し、教育実習一般、民族教育、障害者教育、同和教育について講義を行い、さらに各教科別に具体的な指導を行っている。付属学校を持たない本学としては、教育実習は原則として履修希望者の出身学校（高等学校、中学校のいづれでも可）の協力を得て、ただし、出身学校で承諾を得られない場合には京都市立学校の協力を得て実施している。実習期間は5月中旬から11月中旬までの間の2週間である。事後指導は、全体の教育実習が終了後、各教科別に行われる。

単位の認定については、教育実習校から報告される教育実習成績報告票及び実習生が提出する教育実習ノートと事前及び事後指導の評価を勘案して教育学部において行われる。

履修状況は、昭和63年12月の教育職員免許法の改正による必要修得単位の増加並びに新規教育職員の採用数減等の影響により昭和50～60年代に比して減少傾向にあったが、平成6年度から多少波があるものの増加傾向にある。参考までに、平成4年度から8年度までの実習終了者数と国公立学校に就職した人数を掲げておく。

なお、平成9年度の教育実習は、37都道府県の各国公立高等学校103校、中学校26校、養護学校4校の協力を得て実施した。

1. 学部、研究科別実習実施状況

	学 部 ・ 研 究 科											計	
	総合人間	文	教	法	経	理	薬	工	農	人間・環境	エネルギー		
参加申込者	(1) 10	(2)[1] 38	(3) 32	(2) 10	5	(8)[1] 55	3	(2)[1] 23	(5) 39	(6) 6	(3) 3	(31)[4] 224	
京都市立校	中・高校		1		3	4			3			13	
	養護学校		1			1		1				4	
	取り止めた者 実習終了者			2		3	5	1	3			17	
出身校	中・高校等	7	38	30	10	2	50	3	22	36	6	3	207
	取り止めた者	1	5	3	1		5		1	6	1		23
	中・高校等実習終了者	6	33	27	9	2	45	3	21	30	5	3	184
校種別	中学校	2	2	11		1	6		1	4			27
	高等学校	6	31	16	9	4	43	3	20	29	5	3	169
	養護学校	1		2			1		1				5
実習終了者	(1) 9	(2)[1] 33	(3) 29	(2) 9	5	(8)[1] 50	3	(2)[1] 22	(5) 33	(5) 5	(3) 3	(30)[4] 201	

(注) 枠内の()は大学院生数、[]は科目等履修生数でいずれも内数。

2. 平成4年度～平成8年度 教員として就職した者

年度	総合人間		文		教 育		法		経 済		理		薬		工		農		人間・環境		エネルギー		計	
	就職者	実習者	就職者	実習者	就職者	実習者	就職者	実習者	就職者	実習者	就職者	実習者	就職者	実習者	就職者	実習者	就職者	実習者	就職者	実習者	就職者	実習者	就職者	実習者
H 4	—	—	0	52	1	31	0	9	0	6	8	74	0	2	0	36	0	35	—	—	—	—	9	245
H 5	—	—	3	45	8	19	1	6	1	11	4	31	0	2	0	17	0	26	—	—	—	—	17	157
H 6	—	—	0	68	4	26	0	6	1	5	6	40	0	6	1	17	0	32	—	—	—	—	12	200
H 7	—	—	3	60	6	34	0	8	0	6	1	44	1	8	2	16	0	26	—	—	—	—	13	202
H 8	0	12	1	47	4	33	1	4	0	1	2	42	0	5	0	23	1	16	—	—	—	—	9	183
合計	0	12	7	272	23	143	2	33	2	29	21	231	1	23	3	109	1	135	—	—	—	—	60	987

(教職教育委員会)

お知らせ

経済研究所公開シンポジウム並びに学術講演会の開催

下記のとおり公開シンポジウム並びに学術講演会を開催します。ご来聴を歓迎します。

○公開シンポジウム 「複雑系とは何か」

複雑系の経済学を中心とした学際的共同研究の現状について

日時 平成10年3月14日(土) 9時15分～17時(開場9時)

場所 京都市国際交流会館(京都市左京区粟田口鳥居町2-1) ☎075-752-3010

定員 先着200名(当日受付)

受講料 無料

問合せ先 京都大学経済研究所庶務掛 ☎753-7102

開会あいさつ(午前9時15分)

佐和隆光(経済研究所長)

第一部 複雑系とは何か(午前9時30分～10時20分)

(1) 京大経済研究所とCOE

今井晴雄(経済研究所教授)

(2) 複雑系入門

稲垣耕作(大学院工学研究科助教授)

第二部 複雑系：経済学と環境(午前10時20分～12時)

(1) 均衡マクロ経済動学と複雑系

西村和雄(経済研究所教授)

新後閑禎(経済研究所助教授)

(2) 国際空間経済学と複雑系

藤田昌久(経済研究所教授)

(3) 温暖化対策の経済影響

佐和隆光(経済研究所教授)

秋田次郎(科学技術振興事業団研究員)

第三部 複雑系：認知と行動(午後1時～2時50分)

(1) 交渉の帰結：ゲームの実験

岡田 章(経済研究所教授)

(2) 脳を造る：ニューラル・ネットワークと複雑系

合原一幸(東京大学大学院工学系研究科助教授)

宮野尚哉(未来技術研究所主任研究員)

(3) 脳を知る：思考と行動

西村和雄(経済研究所教授)

飛永芳一(関西新技術研究所主任研究員)

休憩(10分)

第四部 パネル・ディスカッション(午後3時～5時) (司会) 佐和隆光

経済研究所 複雑系経済システム研究センター (財)総合経済研究所

○学術講演会 「ゲーム理論」

講演者 ラインハルト・ゼルテン教授

(ボン大学 1994年ノーベル経済学賞受賞者)

講演は英語で行います。(通訳なし)

一般の社会人、学生や専門外の研究者を対象に、わかりやすくゲーム理論の入門的内容について講演します。ゲーム理論は、社会におけるさまざまなコンフリクトや協力の状況を数理的なモデルを用いて分析する学問です。その応用範囲は広く社会科学、自然科学の多くの分野をカバーしますが、近年、特に、経済学、政治学、生物学に应用され、その発展に大きく貢献しています。講演では、幾つかの簡単な例を用いて、ゲーム理論によって、人間行動の相互依存性についてよりよい理解が得られることが紹介されます。

日時 平成10年3月23日(月) 15時～17時

会場 京都大学法経第2教室

定員 200名(当日受付)

受講料 無料

問合せ先 京都大学経済研究所 岡田 章教授 ☎753-7145

経済研究所

(財)総合経済研究所